

# 2020（令和2）年度 福岡女子大学 一般入試個別学力検査

〔 前期日程試験問題 〕

## 国際教養学科

# 国 語

【 90 分 】

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから19ページにあります。問題は全部で**3題**です。
- 3 解答用紙には裏にも解答欄があります。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄**に**受験番号**を記入してください。
- 6 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください**。





問題一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

自分でよく知らないことばや言いまわしなのに、使っているうちに慣れてしまい、遂には知っているような気分になっていることに気がつき、これはまずいなと思うことがある。まずいだけでなく危険なのだ。だんだんとしをとってきて、もう若く年齢に近づくと、こういうシヨウジヨウが起きててもやむをえないが、近ごろは、どうも若もうろくとも言うべき現象が増えているように思うが、それは肉体が健全なだけにもっとおそろしい。

③ ソボクな言語感覚からみると、異様で、不自然な、現実と合わない表現をみずから使いもし、ひろめるのは、モラルの点でもよくないし、様々の種類の精神的ファシズムや権威主義に道をひらくことになると思うからだ。

私がいまだいぶん前から気になっている表現の一つに、「目からウロコが落ちたような」というのがある。私の経験では、これをよく使うのは、年輩の、いくらか教養があつて、人前でしゃべったり書いたりするのをあまりいとわない、おばさんと呼ばれる層の人に多いように思う。はじめて耳にしたのは、今から二、三十年ほど前、すくなくとも、「一味ちがう」というのよりは前だったように思う。書いてあるのよりは耳で聞いた時の方が早かったと思うのだが、何しろ録音がない。そこで、ここでは、私の手もとにある印刷された資料にもとづいて話をすすめよう。

その一は『朝日新聞』の「声」という投書欄に出た、「専業主婦こそ私の幸せです」という題で、四十歳の主婦の書いた文章だ。書き出しは、いきなりこうなっている。

目からウロコが落ちたような気がする。考えてみれば、私は幸せなのだ。

(一九八八年四月二十六日)

何がウロコ落ちなのかと思ったら、表題にあるように、人並みにパート・タイムに出てはみたが、世間は甘くない。やっぱり専業主婦の方がいいなあと気がついたということのようである。もっと適切な例が他にもいっぱいあるのだろうか、集めようと思ったときにはこういう用例しかなかった。ところが気をつけてみると、こういうおばさん層だけではなく、文章にうるさい作家や文筆家も使っている。次の例は講談社で出している『本』という月刊ピーアール誌に<sup>④</sup>レンサイ<sup>④</sup>されている。「いわさき ちひろ伝」の『つば広の帽子をかぶって』からとってきたものだ。筆者は飯沢匡、黒柳徹子の連名になっているが、この部分の書き手はたぶん前の人だろう。

私がローランサンの絵を知ったのは英国人の近代画紹介の本からで二十代を少し過ぎた頃五十年以上前の話である。戦災でその本も焼いたので今詳しくその本についてここに書くことができないのは残念シゴクだが、私の「目の上の鱗」<sup>⑤</sup>がとれたことは事実であった。

(一九八八年一月号)

ここでは引用符が出てくるから、書き手はそう a にはなく、「近頃世間で言う例の言いぐさにしたがえば」という、ちよつと茶化した気分も、もしかして入っているかもしれないが、それにしても「目の上の鱗」とはめずらしい言い方で、「目からウロコ」よりも一歩進んでいる。この表現の発生のからくりは、すでに日本の伝統の中で定着している「目

の「上のタンコブ」に引かれてのことであろう。あとで述べるように、これは、日本の外で生まれた表現の、日本語への帰化現象であることを説明する貴重な用例である。「上の」のおかげで、異様なウロコの中に、わかりやすいタンコブがしのび込ませられている。

ところで最近では、おばさんや物書きの人だけではなく、学識教養ともにすぐれた比較的若い、大学の先生でも使う。たとえば、

ところがだ、この間、トラッドギルというイギリスの社会言語学者の本を読んでいたら、目から鱗が落ちるような説明にぶつかつたんだ。  
(沼野充義『屋根の上のバイリンガル』一九八八年、筑摩書房刊)

例はこのくらいにしておこう。私の好みから言うと、こんなことばは絶対に使いたくない。だいたい、ウロコは魚とかへびにあるかもしれないが、人間に、ましてや、目などにあつてたまるもんか。そんなありもしないことを平気で言っちゃつてと思っているとき、今から百三十年ほど昔のドイツ語の本を読んでいたら、このままの言い回しが出てきたではないか。私はその話を、ちょうど、小平の教養部の授業に行くバスで、隣に乗りあわせた国語学の先生にしていた。すると、それを聞いていたらしい、英文学の齊藤忠利教授が、「それはね、聖書の使徒行伝の中に出てくる話ですよ。何かウロコのようなものが目から剥がれ落ちて、突然目が見えるようになったというので、たぶん眼病のかさぶたみたいなものじゃないですか」とさりげない調子で教えてくれた。なるほどそれならわかる話だ。それにしても英文学者というのはものしりだなあ、かな

わないなあと感じました。

授業を終えて研究室にもどつてくると、私は大急ぎで、研究社の『新英和大辞典第五版』（一九八〇年）で、ウロコにあたる *scale* のところを引いてみた。The scales fell from his eyes とあつて、使徒行伝の第九章からと出典が示してある。ついでに他の西洋語ではと調べてみると、小学館の『独和大辞典』（一九八五年）、『研究社露和辞典』（一九八八年）にも典拠つきで現われる。フランス語では三省堂『クラウン』（一九七八年）、旺文社『ロワイヤル』（一九八五年）、大修館『新スタンダード』（一九八七年）などのすべてにこの言いまわしが登場し、この最後のものは出典も示しているが、なぜか、使徒行伝十一章と、章をまちがえている。大冊の白水社『仏和大辞典』はなるほど貫禄十分、聖書のこの一節全体を日本語訳で三行にわたつて引用するというていねいさである。これで見ると、日本の対訳辞典の中では、どうもフランス語学者たちが、「目からウロコ」の説明に最も熱心であるらしく、私としては甚だ好感が持てる。<sup>⑦</sup>

ところが不思議なことに、ランゲンシャイトの仏・独には「目からウロコ」がないので、こんどはその同じ社の独・仏からせまってみると、*ses yeux se sont dessillés* と、b もそつけない言い方が出ていて、ウロコは消えている。なぜだろうか。今日のフランス人はもはや「目からウロコ」などと言わなくなっているのではないだろうか、すなわち、私の感覚に近いのではないだろうかと思つてみる。

ロシア語についておもしろいと思つたのは次のことだ。すなわち、英、独、仏いずれも、ウロコは複数になっているが、ロシア語では *Kak neneta (c rnas) ynarua* のように単数で出てくる（ところが目は複数になっているところがおかしい）。そし

てこの単数の語の本来の意味は「薄皮、膜」というような意味だから、「一枚の薄皮」がばらつと剥げたという感じなのに英、独、仏の方は、何片ものウロコがばらばら、ぼろぼろと剥げ落ちてくるという、ちょっとかゆくするような情景である。思うにロシア語では、いくら何でも「目のウロコ」などと、<sup>c</sup>経験に反することは言えなかつたので、かわりに「膜」となつたのではないか――。

ここまで書いてから、ロシア語の聖書を持つていることに気がついて、その箇所を開いてみるとこうだ。И тотчас как-бы *newjiz otjala ot rjaz ero.* 驚きました。聖書ではちゃんとウロコとなつてゐる。それなのに、日常では人々は「膜」と言つてゐる。これはいよいよ私の推定を支持するものではないだろうか。聖書のウロコを、ウスカワに変えたのは、民衆の健全な日常言語の感覚ではないだろうか。

以上、簡単に片づけてしまつたが、ほんとうは、古代教会スラヴ語や、ヘブライ、希・拉語におよぶ聖書学の知識をもつて、ウロコの比較意味論を行なつた上でないと、たしかなことは言えないのだが、今回はそういうことが目的で話をはじめたのではない。

こういう調べの結果、私が感じたのは次のようなことだ。私が、「目からウロコ」などとほらざらしいと、三つの文章を引いたが、しかしそれが聖書にさかのぼる、<sup>8</sup>ユイシヨのあることばだと知らなかつたのは、この私だけであつて、じつはその三人の書き手のすべて、あるいは一部は、そんなことは先刻御存知だつたのかもしれない。そうすると、私は自らすすんで自分の無知をバクロしてしまつただけということになるが、私はやはりそんなことは無いだろうという気がする。

となると、いったい日本語の辞書はこれをいつごろから登録し、どう説明してゐるのだろうかと調べてみる必要がある。

ちよつと古いところからはじめて、たとえば一九三六年の平凡社の『大辞典』には、「メカラヒガデル」はあつても「メカラウロコ」はない。ないからと言って、その頃、人が誰も言わなかったということにならないのが字引きの困った点だ。次に、そのちよつと四十年後の刊行でもあり、大きくもあるということから、小学館の『日本国語大辞典』（一九七六年）を見ると、これには出ていて、その最初の書きだしが、意味の説明をさし置いて、まず「新約聖書の『使徒行伝』から出たことば」と、由来から説明している。大変役にたつのは『広辞苑』である。なぜならこの初版（一九五五年）には無いのが三版（一九八三年）には現われているというぐあいに、ことばと世のうつりかわりが映し出されているからである。そして最近の三省堂の『大辞林』（一九八八年）は、「九章から」というところまで示したダイヤクシンぶりである。つまり、『広辞苑』の諸版からみると、「目からウロコ」は、一九五〇年代では、まだ字引きに現れるほど誰でも使うことばではなく、変化はその後の二十年ほどの間に起きたことがわかる。この変化が何によるものか、とても書きたいところだが、今はできない。

D この変化が生じた時代のもので、多感な言語形成を行ってきた私のような年代のものは、目ざとくことばのうつり変りに気づいて、つい、いろんなことが言ってみたくなる。ところがちなみに若い世代にとっては、問うもおろかなことなのである。十数人の学生諸君に、このことばの出どころは何だろうかと訊ねたところ、一人は「仏典」、一人は「古事記」、他は「江戸文学」、最後に一人が「聖書だと聞いたことがある」と厳密性をもって答えた。変化はすでに完結してしまったのである。

E  
(田中克彦『ことばの自由をもとめて』による)

注 希・拉語……希臘語(ギリシヤ語)・古典語(ラテン語)を省略した言葉。

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 文中の空欄 a に当てはまる最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

(あ) 無信心 (い) 無理やり (う) 無尽蔵 (え) 無気力 (お) 無邪気

問三 文中の空欄 b に当てはまる漢字一字を答えなさい。

問四 傍線部 A 「日本の外で生まれた表現の、日本語への帰化現象」とあるが、①「日本の外で生まれた表現」とは何か、

答えなさい。②また、「日本語への帰化現象」について、どういう現象を指して「帰化現象」と言っているのか、説明しなさい。

問五 傍線部 B 「なるほどそれならわかる話だ」とあるが、筆者はどのような点に納得しているのか、説明しなさい。

問六 傍線部 C 「経験に反することは言えなかった」とあるが、どのようなことが「経験に反する」というのか、答えなさい。

問七 傍線部 D 「この変化」とは、「目からウロコ」がどのようなものになったことか、文中から該当する八字を抜き出しなさい。

問八 傍線部 E 「変化はすでに完結してしまった」とあるが、筆者はなぜ「完結」と判断したのか、答えなさい。

問九 冒頭にある二重傍線部「危険なのだ」について、筆者はなぜ「危険」だと考えているのか、説明しなさい。

問十 ことばの変化についての筆者の考えに対するあなたの意見を、理由もあわせて三百字以内で述べなさい。



問題二 (甲)と(乙)の文章を読んで、後の問に答えなさい。(ただし、設問の都合上、返り点、送り仮名などを省いたところがある。)

(甲)

仲尼間居、曾子侍坐。子曰、参、先王有至徳要道、以訓天下。

民用和睦、上下亡怨、汝知之乎。曾子避席曰、参不敏、

何足以知之乎。子曰、夫孝徳之本也。教之所由生也。復坐、

吾語汝。身体髮膚、受于之父母。不敢毀傷、孝之始也。

立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。夫孝始於

事親、中於事君、終立於身。

(『孝経』による)

(乙)

范宣年八歳ノトキ、後園挑菜ニツム、誤傷リテツケ指大啼ヲイニク。人間フ、痛邪キト。

答曰ヘテ、非為ズニ痛キガ。身体髮膚ニ、不敢毀傷ニ、是以啼耳ヲテククト。

宣潔行廉約ニシテ、韓豫章遺おくるモ絹百匹ヲ不受ケ。減ズルモ五十匹ヲ。

復不受ケ。如クシテ是減半シテ、遂至ニ一匹ニ、既終不受ケ。

(『世説新語』による)

注 ○仲尼……孔子。 ○曾子……孔子の弟子、名は参。

○范宣……博覧を以て世に聞こえた学者。

○韓豫章……韓伯。范宣が住んでいた豫章の太守。

○匹……反物(布)を数える単位。

問一 傍線部A「間居」の「間」の意味として、最も適切なものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア あいだ    イ ひそかに    ウ へだてる    エ かわるがわる    オ まじる    カ ひま

問二 傍線部B「至徳要道」とは具体的に何を指すか答えなさい。

問三 四角囲み①「訓」、②「語」の主語（人名）をそれぞれ答えなさい。

問四 傍線部Cにおいて曾子が「避席」した理由として最も適切なものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 教えを乞うのに敷物に座ったままでは失礼だと考えた。

イ 既に話が済んだので帰ろうとしていた。

ウ 知らないだろうと言われて気分を害して席を立った。

エ 自分には知る必要の無い話だと思って帰ろうとした。

オ 上下関係を考えて他者より目立つのはよくないと思い席を離れた。

問五 傍線部D「何足以知之乎」を「なんぞもってこれをしるにたらんや」と読むための返り点を、解答欄の白文に付けな  
せよ。

問六 傍線部Eの「曰」の発言はどこまで続くか。終わりの二文字を答えなさい。

問七 傍線部Fを現代語訳しなさい。

問八 傍線部G「顕父母」とは、どのようにすることか、わかりやすく説明しなさい。

問九 傍線部Hの泣いた理由として最も適切なものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 菜をたくさん摘まないと親に叱られるのが恐い。

イ 菜を摘まないと親に食べさせるものがなくて申し訳ない。

ウ 菜をたくさん摘めないことの言い訳にするため大げさにした。

エ 不用意に指を傷めたことが親に申し訳ない。

オ やせ我慢をしたが菜を摘むと指が痛かった。

カ 泣けば菜を摘まなくても済む。

## 問十

范宣が贈り物の絹を受け取らなかった理由を（甲）の文章の後半部から推測して説明しなさい。

問題三 次の文章は、『無名草子』の一節である。文章を読んで、後の問に答えなさい。

いみじかりける延喜、天曆の御時の古事も、唐土、天竺の知らぬ世のことも、文字といふものなからましかば、今の世の我らが片端も、いかでか書き伝へましなど思ふにも、なほ、かばかりめでたきことはよもはべらじと言へば。

また、何の筋と定めて、いみじと言ふべきにもあらず、あたにはかなきことに言ひ慣らはしてあれど、夢こそ、あはれにいみじくおぼゆれ。遙かに跡絶えにし仲なれど、夢には関守も強からで、もと来し道もたち帰ること多かり。別れにし昔の人も、ありしなごらの面影を定かに見ることは、ただこの道ばかりこそはべれ。上東門院の『D』と詠ませたまへるも、いとこそあはれにはべれなど言ふ人あり。

また、あまた、世にとりていみじきことなど申すべきにはあらねど、涙こそ、いとあはれなるものにてはべれ。情なき武士の和らぐこともはべり。色ならぬ心のうちあらはすものは、涙にはべり。いみじくまめだち、あはれなるよしをすれど、少しも思はぬことには仮にもこぼれぬことにはべるに、はかなきことなれどうち涙ぐみなどするは、心に染みて思ふらむほど推し量られて、あはれに心深くこそ思ひ知られはべれ。亭子の帝の御使ひにて、公忠の弁の『F』と詠みけむ、ことわりにぞはべるやと言ふ人あれば。

また、こと新しく申すべきにはあらねど、この世にとりて第一にめでたくおぼゆることは、阿弥陀仏こそおはしませ。念仏の功德の要などはじめて、申すべきならず。南無阿弥陀仏と申すことは、返す返すめでたくおぼえはべるなり。人の恨めしきにも、世のわびしきにも、もののうらやましきにも、めでたきにも、ただいかなる方につけても、強ひて心に染みて

もののおぼゆる慰めにも、南無阿弥陀仏とだに申しつれば、いかなることもこそと消え失せて、慰む心地することにてはべり。人はいかがおぼさるらむ。身にとりてはかくおぼえはべれば、人の上にて、ただ南無阿弥陀仏と申す人は、さ思<sup>G</sup>ふならむと、心<sup>は</sup>にくく、奥ゆかしく、あはれに、いみじくこそはべれ。左衛門督公光と聞こえし人、もと見慣れたる宮仕人の、異心など使ひけると聞きて後、たまたま行き逢ひて、今はその筋のことなどつゆもかけず、大方の世の物語、内裏わたりのことばかり、言少なにて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言はれてはべりけるこそ、来し方行く先のこと言はむよりも恥づかしく、汗も流れていみじかりしかと語る人はべりしが、まして後の世のため、いかばかり要事にてかはべるらむと言へば。

また、功德の中に、何事かおろかなると申す中に、思へど思へどめでたくおぼえさせたまふは、法華經こそおはしませ。いかにおもしろくめでたき絵物語といへど、二三遍も見つればうるさきものなるを、これは、千部を千部ながら聞きたびにめづらしく、文字ごとにはじめて聞きつけたらむことのやうにおぼゆるこそ、あさましくめでたけれ。無二亦無三<sup>また</sup>とおほせられたるのみならず、法華最第一とあめれば、こと新しくかやうに申すべきにはあらねど、さこそは昔より言ひ伝へたることも、必ずさしもおぼえぬこともはべるを、これは、たまたま生まれあひたる思ひ出でに、ただこの經にあひたてまつりたるばかり、とこそ思ふに、など、源氏とてさばかりめでたきものに、この經の文字の一偈<sup>げ</sup>一句おはせざるらむ。何事か、作り残し書き漏らしたること、一言もはべる。これのみなむ第一の難とおぼゆると言ふ。

(『無名草子』による)

注 上東門院……藤原彰子。道長の娘で、一条天皇の中宮。

亭子の帝……ここでは醍醐天皇のこと。

公忠の弁……源公忠、歌人。三十六歌仙の一人。 左衛門督公光……藤原公光、権大納言。歌人。

源氏……源氏物語。 偈……仏の教えをたたえる韻文体の詩句のこと。

問一 傍線部①「天然」、②「関守」、③「功德」の読みを書きなさい。

問二 波線部(い)～(に)の語句の意味を、本文に即して書きなさい。

(い) あだに (ろ) まめたち (は) 心にくく (に) つゆもかけず

問三 傍線部A「文字といふものなからましかば、今の世の我らが片端も、いかでか書き伝へまし」を現代語訳しなさい。

問四 傍線部B「遙かに跡絶えにし」の意味として、最も適切なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつての身分に戻れなくなってしまった イ かなり前に後継者がいなくなった

ウ ずっと以前に関係が絶えてしまった エ 昔住んでいた場所を失った

オ 遠い故郷のことを忘れてしまった

問五 傍線部C「この道」は何をさすか、答えなさい。

問六 文中の空欄 D と F には和歌の一部が入る。それぞれ該当する和歌を、次の選択肢から選び、記号で答えなさい。

い。

ア もの思へば沢のほたるも我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

イ 思ふらむ心のうちは知らねども泣くを見るこそあはれなりけれ

ウ 思ひきやあまつ空なるあまぐもを袖してわくる山踏まむとは

エ わがやどの花見がてらに来る人は散りなむのちぞ恋しかるべき

オ 逢ふことも今はなき寝の夢ならでいつかは君をまたは見るべき

問七 傍線部E「情なき武士の和らぐこと」とは、何がどのようなことになることを言うのか、書きなさい。

問八 傍線部G「さ思ふならむ」の「さ」の示す内容を答えなさい。

問九 次に掲げるものうち、「文字」以外に、話題として特に取り上げられ賞賛されているものには○、それ以外のものには×を、解答欄に記しなさい。

ア 世　イ 夢　ウ 涙　エ 阿弥陀仏　オ 宮仕人　カ 法華経

問十 傍線部H「これのみなむ第一の難」とは、どのようなことか。「これ」の内容がわかるように答えなさい。

問十一 「延喜・天曆」の頃に成立した作品を、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 古今和歌集　イ 源氏物語　ウ 今昔物語集　エ 新古今和歌集　オ 平家物語

